

感謝と達成感

岡崎市立岡崎小学校 徳原 悠人

「いつ何が起きるか分からない、今日の練習で部活動が最後になっても後悔しないように練習しよう」、そうチームのミーティングで決め、懸命に練習に取り組んできた。新型コロナウイルスの影響で先に対する不安のある中、懸命に声を出し、ボールを追いかける子どもたちの姿には何度も心を打たれた。そんな子どもたちの姿を見て、顧問として「この子たちに何とかして達成感を味わわせてやりたい。頑張ってきた自分を誇れるような大会にしてやりたい」、そんな思いが大きく膨らんでいった。

そして迎えた球技大会。厳しい接戦を何とかものにしながらか決勝戦まで勝ち上がり、優勝することができた。優勝が決まった瞬間の子どもたちの笑顔は忘れられない。

大会が終わり、学校に帰ってから「今の気持ちを誰かに伝える手紙を書こう」と子どもたちに提案した。手紙の相手は様々だ。一緒に頑張ってきた仲間に「〇〇のおかげで頑張ってきたよ。これからも一緒にサッカーを続けよう」、支えてくれた家族に「真剣に応援してくれてありがとう。試合には出られなかったけど応援を頑張れたので悔いはないです」、指導してくれた先生に「先生の指導のおかげで優勝することができました。ありがとうございました」と。誰の手紙を読んでも、そこには感謝の気持ちや達成感の大きさが分かる言葉があった。その言葉一つ一つから、大会を通しての子どもたちの成長を実感することができた。

最後に、急な日程や会場の変更もあった中、大会運営に携わってくださった先生方に心から感謝を述べたいと思います。本当にありがとうございました。



優勝以上の価値

岡崎市立愛宕小学校 中崎 光祐

「部活はいつからできますか」、「早く部活がやりたいです」。この言葉は、6月に学校が再開され、数日経ってからの6年生の子どもたちの言葉である。この言葉を聞いたときに、子どもの部活動に対する熱意を感じて嬉しくなった。

部活動が再開された7月。最初のうちはよかったが、コロナ禍のため個人練習しか行えないせいか、少しずつ児童のモチベーションが下がっているように感じた。学校が再開されたときの熱意を失わせてはいけないと思い、ミーティングを行った。チームの現状の問題点を出し合い、それを踏まえてこれからどう取り組んでいくか話し合った。ミーティングを行う前、キャプテンのA児は今のチームの状態を憂いていた。そんなA児に「その思いを素直に伝えれば、みんな分かってくれるよ」と話した。チームのために何とかしようとして頑張っていたA児。行動では示すことはできるが、声で引っ張るタイプではなかった。しかし、ミーティングの一番初めにA児がチームに対して思っていることの全てを伝えた。日頃ははっきりとすることがないA児が、一生懸命に話す姿を見て、他の部員はその思いを感じ取ったらしく、真剣に耳を傾けて聴いていた。その姿を見て、もう大丈夫だと確信した。

迎えた小学校体育大会。今までの練習の成果を十二分に発揮し、決勝まで進むことができた。決勝では劣勢の中、ベンチに戻ると作戦盤を出し、戦術を話し合う子どもたちの姿にチームとしての成長を感じた。結果は準優勝だったが、あのときに自分の気持ちを伝えたことで大きく成長したA児、そして、その思いに応えたチームにとっては、優勝以上の価値が間違いなくあった。

最後に、大会の運営にあたっていただいた先生方に心から感謝を述べたいと思います。先生方が臨機応変に対応していただいたおかげで無事に大会を終えることができました。私自身も学ぶことの多い大会となりました。この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。



球技大会を終えて

岡崎市立岩津小学校 石谷 将大

「僕たちは、ソフトボールをやるからには、勝てるチームを目指したいです。」
新チーム発足のとき、毎年子どもたちに、どんなチームにしたいか聞くようにしている。たいてい同じような返事が返ってくるのだが、今年のチームは語気が強かった。例年に比べ、練習に取り組む熱意もある。

そんな子どもたちが昨年度末に出場した大会は、予選2位通過。決勝トーナメント進出を決めたところで、新型コロナウイルス感染症拡大による臨時休業となり、大会は中止となってしまった。休業中のため、部活動を行えない期間が2か月半もあった。夏休みは休業期間の学習の遅れを取り戻すため、部活動に時間がさけない日々が続いた。「この休みの過ごし方が、大会に影響してくるから体を動かし続けるように」と、子どもたちに会うたびに言い続けた。

夏休みが明け、徐々に通常の学校生活に近づくとともに、部活動も再開していく。部活動の休みが続いた分、動きは鈍くなっていたが、予想していたよりはよかった。あの新チーム発足時の熱い思いは今も続いている。練習試合も解禁され、できる限り練習試合を予定に組み入れた。練習試合を重ねるごとに多くの課題が見つかり、それを練習で改善する。これを繰り返し積み重ねることで、チーム力が高まっていくのを感じた。

いよいよ、最後の球技大会。組み合わせが決まり、子どもたちのモチベーションも最高潮となった。さあ、決戦の時。そう思った矢先、新型コロナウイルス感染症拡大により、球技大会延期。「またか」と声が聞こえて来ると思ったが、子どもたちからは、「大会は中止じゃなくて、延期ですよ。残念だけど、まだ練習ができると思って前を向きます」との声が聞こえた。こうした環境の中、前を向いて進もうとする心、大会を行えることへの感謝の気持ちが伝わり、子どもたちの心の成長を感じた。「何としても勝たせてあげたい」、そう思った。

台風の影響もあり、なかなか予定通りに試合が組まれず、調整する期間が続いた。子どもたちのモチベーションを維持し続けるのにも苦労した。迎えた初陣。緊張から思ったプレーができない。完全に浮足立っていた。「何も難しいことをする必要はない。今まで練習してきたことをきっちりやろう」と声をかけると、次第に落ち着きを取り戻し、いつもの姿に戻っていった。一戦一戦勝ち上がるごとに成長していく子どもたち。特に著しく成長できたのは、準決勝戦である。相手チームのピッチャーは球速があり、体格のいい子どもが多い。いつもの子どもたちなら相手を見て、物怖じして体が固まると思ったが、よく集中していた。この子どもたちの姿から、自分を信じ、仲間を信じるチームとしての成長を感じ、この試合の勝利を確信した。勢いそのまま、優勝という形で締めくくることができた。

この経験をさせてくれた子どもたちに感謝するとともに、この小学校の部活動で学んだ心の成長を今後の生活に生かして行ってほしいと願う。また、子どもたちにとってかけがえのないこの最後の大会を運営し、役員として動いてくださった先生方に、この場をお借りして感謝申し上げます。ありがとうございました。



前向きに取り組むこと

岡崎市立矢作北小学校 竹田 俊一

コロナウイルスの影響で先の見えない中スタートした新学期、「今年の球技大会はできない」と誰もが思っていたのではないだろうか。

活動が少しずつ再開したころ、普段なら子どもたちの元気な声が体育館中に響き渡るが、ボールの落ちる音しか聞こえてこない。先の不透明な中での練習の再開。そんな中でも子どもたちは前向きだった。活動ができなかった期間を埋めるために、また、少しでもレベルアップするために集中して取り組んだ。

9月に入り、練習内容も普段と変わらないような練習と練習試合ができるようになった。子どもたちは、大会に向けて「1本でも多くボールを触る」を合言葉に練習に取り組んだ。大会が延期になったときも子どもたちは前向きで、「大会までもっと上手くなれる」と言いながら、限られた練習時間を無駄なく大切に過ごした。

そして迎えた大会当日。流れを引き寄せられずそのまま負けるのではと思う場面も何度もあった。でも、どんな時でも前向きにチーム全員で協力し、何とか決勝戦まで勝ち進むことができた。決勝戦の相手には、あと1歩力及ばず負けてしまったが、最後まであきらめずに戦い抜くことができた。

大会を通して、子どもたちは前向きに取り組むことの大切さを学んだ。また、今回はこのような状況の中、子どもたちが輝ける場を与えてくださり本当にありがとうございました。大会を運営してくださった方々には、感謝の気持ちしかありません。

